待望の7年ぶり来演！

フランス国立リヨン管弦楽団×五嶋 龍

進化を続けるヴァイオリニスト

フランス第2の都市リヨンから、45年の歴史を持つ「フランス国立リヨン管弦楽団」が来演。タクトを振るのは、過去7回ものグラミー賞受賞に輝いた音楽監督のレナード・スラットキン。天才ヴァイオリニスト五嶋龍と奏でるラロの「スペイン交響曲」は聴き逃せない。海外オーケストラとの共演でこの名曲がザ・シンフォニーホールで演奏されるのは史上初。フランスの色彩豊かなサウンドと、超絶技巧とエネルギッシュな感性が織りなす美しき音楽の世界を堪能したい。

ARTIST VOICE ▶▶▶ *Ryu Goto*

五嶋 龍

「フランスのオケと奏でる“ラロ”。どんな化学反応を起こせるか」

Photo by E.Miyoshi

――空手を趣味とし、ハーバード大学で物理学を専攻されたそうですが、演奏に通じることはありますか？

物事を広範囲に見つめながら、疑問の答えに辿り着く点が、武道、物理学、音楽にすべて共通していると感じます。基礎があって、次に進めるのはどれも同じで、「剛と柔」「緩と急」が自由に身につくように教えられます。集中力、忍耐、継続、創造力、想像力、美的感覚、理論的解釈…。ヴァイオリンを弾く時も、それは役立っていると感じます。常にリラックスをして全身のバランスを整え、その時々に応じて、どの身体の部分が目的にかなった使い方をされるのかを考えて演奏しています。

――ラロの「スペイン交響曲」をフランスのオケと共演することについてその魅力や想いとは？

「スペイン交響曲」は、フランス人の作曲家であるラロが描いたものですが、ところどころにスペイン風のリズムが現れるのが魅力です。フランス語で語るように弾いてみると、僕が今まで弾いていた「ラロ」の音の質が違ってきます。現地で弾く時は、ほとんどの聴衆がフランス人ですが、今回は聴衆の多くが日本人ですし、さて、どうする？という感じです（笑）。フランスの作曲家がスペイン風に書いた曲を、フランスのオーケストラとアメリカの指揮者と、僕が奏でる時、三者の風がひとつにまとまり、すばらしい響きを届けられると信じています。

――クラシック音楽の演奏家として、テクニック以外に重要だと思うものとは？

弾き手として、社会の移り変わりに敏感になり、現代人の思考に合った音楽を届けることも（勇気は必要ですが）時には大切だ、と考えます。クラシックは、当時、音楽の流行の波に乗っていたのでは？

――ザ・シンフォニーホールと大阪のお客さまへ、メッセージを！

大阪のザ・シンフォニーホールのコンサートでは、例外なく、気持ちよく演奏をさせていただきました。音響がすばらしい上に、スタッフが優しく、会場入り口の空間も好きです。大阪出身である母の友人がたくさん聴きに来てくださるので、演奏後はアットホームな雰囲気でリラックスできます。大阪のみなさまも、僕の演奏を思いっきりレシーブして、明日への活力にしてくださるよう、願っています。

五嶋 龍

7歳でコンサート・デビュー。ソリストとして日本国内はもとより、世界各地のオーケストラと共演する。空手・ギターを趣味とし、世界各国で社会貢献・教育活動に積極的に取り組む。使用楽器は、日本音楽財団より貸与された1722年製のストラディヴァリウス「ジュピター」。ハーバード大学（物理学専攻）を卒業。JR東日本のCMに出演中。ニューヨーク在住。

フランス国立リヨン管弦楽団 & 五嶋 龍

［指揮］レナード・スラットキン ［ヴァイオリン］五嶋 龍
［管弦楽］フランス国立リヨン管弦楽団

2014. 7/12（土）3:00PM

バーンスタイン：「キャンディード」序曲
ラロ：ヴァイオリン協奏曲 第2番 ニ短調「スペイン交響曲」op.21
サン=サーンス：交響曲 第3番 ハ短調「オルガン付」op.78

A 18,000円　B 15,000円　C・D 売切　主催：朝日放送

［ご予約］ザ・シンフォニー チケットセンター 06-6453-2333
［お問い合わせ］ABC チケットインフォメーション 06-6453-6000

© DavidDuchon-Doris

© NikoRodamel

フランス国立リヨン管弦楽団

フランスの文化都市リヨンが誇る、由緒あるオーケストラ。地方オーケストラ再編の一環として1969年「ローヌ=アルプ管弦楽団」を設立。1983年にリヨン歌劇場管弦楽団が誕生したのを機に、名称を「フランス国立リヨン管弦楽団」と改め、主に交響作品を演奏するようになった。歴代の音楽監督として、ルイ・フレモー、セルジュ・ボド、準・メルクルが務めた。